Interview

2年の構想を経てシューベルト作品に取り組む
カティア・ブニアティシヴィリ

Khatia Buniatishvili

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

ピアニストのカティア・ブニアティシヴィリが、自身初のシューベルト作品集『シューベルト・アルバム』を録音した。そのアルバムの収録曲をプログラムの中心に据えツアーをスタートした彼女に、今回のツアーの感触やシューベルトを取り上げるに至った経緯、アルバム・ジャケットの撮影秘話などを聞いた。

今年2月、カティア・ブニアティシヴィリが日本公演をキャンセルしたのは本人も含め皆にとって大変残念な出来事だったが、幸いすっかり回復して欧州ツアーをスタートした彼女のコンサートを、3月27日ミュンヘンのプリンツレゲンテン劇場で聴いた。翌日ルートヴィヒ・ベックの音楽フロアでのイベントに向かう前、宿泊先のホテルでインタヴューに応じてくれた。

録音したシューベルトの楽曲への思い

——新譜のテーマにシューベルトとは意外に思いましたが、昨日の演奏は真実の感情がほとばしる深い表現で、休憩中からすでに余韻が心を満たしていました。

カティア・ブニアティシヴィリ（以下、B） シューベルトを録音するアイディアは、実は2年ほど前から温めていて、今が良いタイミングだと思ったのです。彼の死に一番近い最後のピアノ・ソナタから生に逆戻りして、即興曲、そして彼の音楽の核となっている歌曲で締めくくりたいと思い描いていました。その「ピアノ・ソナタ第21番」D960は日本の聴衆のみが創り上げることのできる完全な静寂と集中力の中で初演したかったのですが、体調を崩し、叶いませんでした。

——昨日も、各楽章ごとに拍手が入るなど雑音も多く、咳込んで退席する人もいましたね。

B それは気づきませんでした。楽章間の拍手は、ドラマトゥルギー上は理想的でないにしても、基本的には迷惑ではありません。日頃クラシックの音楽会に慣れていない人たちが来てくれている印ですから、喜ばしいことです。咳も故意ではないし、昨日のお客様はとても温かかったので、弾き心地がよかったです……。それでも日本は特別で、私は日本から今までに、例えば忍耐などたくさんのことを学びました。

アルバムでは、自身のアイディアを形に

——主題のメロディは、死を目の前にした人が人生の各シーンを振り返って慈しんでいるようで、心を打たれました。

B 私もこのテーマと第2楽章のためにこのソナタを選んだのです！ フェルマータの休止の後に戻ってくるところなど、この時代には常用されていない手法で、強い感銘を与えます。

私は録音セッションで初めて音楽作りをしたいと思っているので、その前にコンサートで弾いたりせずにまっさらな状態で臨みます。でもこのテーマは「人生のメロディ」だと感じるので、どうやって弾いたらいいか、何を表現したらいいか、多少不安ではありました。そのとき助けになったのは、ただ呼吸して、感じたように弾くことでした。ゆっくりと流れる川のように、音色と一緒に漂うのです。

長調ですが、その裏にある悲しみも表現

演奏会後のサイン会でファンと交流したブニアティシヴィリ（3月27日・筆者撮影）

シューベルト「ピアノ・ソナタ第21番」のテーマは「人生のメロディ」だと感じます

Photo=Sony Music Japan International

されています。人は独りで生まれ、独りで死んでいくという孤独を受け入れるメロディです。それを受け入れるとシューベルトの音楽との対話が生まれるのです。第1楽章はそうした生を謳っていますが、第2楽章の中で長調になる部分では「死→完全な孤独」と初めて向き合うのです。そのうちまた生に戻り、死と対峙したことも忘れてしまう、という構成をこのソナタから感じています。

私は、録音するときは作曲家と直接コンタクトを取りたいので他の録音は聴きませんが、CDのカバー写真（左下参照）の撮影は録音の前だったので、「シューベルトの音楽が創り出す川」を表現できるよう、撮影時に第2楽章を流してもらえるように頼みました。自分の録音はまだないわけですから、本当に多くの有名な録音を流してもらいましたが、一つも私の求めているものに出会えませんでした。自分の頭の中にある確固たるイメージをあの写真に込めたのですが、そのイメージはいつかどこかで聴いた演奏から作り上げたのだ思っていました。でも自分固有のアイディアなのだと初めて気づき、残念に思うとともに、それを録音する必要を再認識して嬉しくもなりました。

芸術家としてできることは？

――この写真のテーマは何ですか。

B　シューベルトの歌曲《死と乙女》です。私のアイディアですが、でも自死したのは一人の人間ではなく、全ての人間が持つ「女性的な部分」です。シューベルトの音楽の中にはとても多くの「女性的な部分」が感じられます。私たちは「女性的」というと「弱さ→傷つきやすさ」と結びつけてしまうのですが、「弱さ」は裏を返せば「強さ」にもなるので、それを享受するため「弱さ」との訣別を表しています。

――昨日は《糸を紡ぐグレートヒェン》や《魔王》も素晴らしかったのですが、CDに収録しなかったのはなぜですか。

B　歌曲を1曲選ぶなら《白鳥の歌》の〈セレナード〉が一番、色々なアプローチができるからです。例えば、最初は叙情的に、2度目は情熱的に、そして少し落胆し、怒りや不幸、幸福、そのときどきの心境が反映できるメロディだからです。

――どのようにして、表現を深く掘り下げていくのですか。

B　作曲家についての本を読んだり、自分の人生哲学を発展させたりして、楽譜から作曲家の脳を読み取ります。最初は私の手が弾いている音が、彼の表現したかった音色を探っていくことで彼の音楽として生き返り、彼の脳の中に深く入って行かれるのです。そんな演奏を通して聴衆の人生に解決法や意義を与えることができたら、それが芸術家にとって最高の幸せなことだと感謝に絶えません。

CD情報

「カティア・ブニアティシヴィリ シューベルト・アルバム」

〔シューベルト「ピアノ・ソナタ第21番」、「4つの即興曲」、歌曲集《白鳥の歌》より〈セレナード〉（リスト編）〕
Sony Classicalから5月22日発売予定
[S-SICC30509]